

イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ幼虫）に対する本田防除適期

[要約]

イネ縞葉枯病に対して、ヒメトビウンカ第二世代幼虫発生開始期から幼虫発生盛期の始期にシラフルオフエン乳剤を用いて本田散布を行うと防除効果が高い。

農業総合センター農業研究所	平成28年度	成果区分	技術情報
---------------	--------	------	------

1. 背景・ねらい

近年、県西地域を中心にイネ縞葉枯病の発生が増加傾向にある。本県の奨励品種のほとんどは縞葉枯病抵抗性を持たないため、本病の媒介虫であるヒメトビウンカに対する薬剤防除が必要である。ヒメトビウンカ第二世代幼虫に対して幼虫発生盛期の始期～中期に本田散布を行うと発病抑制効果が高い（平成26年度主要成果「ヒメトビウンカ幼虫に対する本田散布のイネ縞葉枯病発病抑制効果」）ことは分かっているが、防除適期の早限は明らかになっていない。そこで、ヒメトビウンカ幼虫を対象とした本田散布の防除適期の幅を明らかにする。

2. 成果の内容・特徴

- 1) 平成28年の筑西市現地圃場における無防除区のヒメトビウンカ第一世代成虫（以下成虫とする）は5月25日頃に発生し始め、発生盛期は6月4日から6月18日頃である。また、第二世代幼虫（以下幼虫とする）は6月14日頃に発生し始め、発生盛期は6月20日から7月4日頃である。（図1）
- 2) 幼虫発生盛期の始期である6月20日の本田散布（シラフルオフエン乳剤、商品名：MR. ジョーカーEW、2000倍）では、幼虫密度が速やかに低下し、イネ縞葉枯病の防除効果が高い。また、成虫発生盛期の中期および幼虫発生開始期である6月14日の本田散布では、幼虫密度が概ね低く推移し、本病の防除効果が高い。なお、6月14日は幼虫密度が低い時期の散布ではあったが、成虫に対する効果があったため、本病の防除効果が高かったと推察される。（図2、図3）
- 3) 成虫発生盛期の始期である6月6日の本田散布は、幼虫密度の低減効果が低く、6月20日の散布と比較して本病の防除効果が劣る。また、幼虫発生盛期の中期である6月27日の本田散布は、幼虫密度の低減効果が認められるものの、散布時の幼虫密度が高いことから、6月20日の散布と比較して本病の防除効果が劣る。（図2、図3）
- 4) イネ縞葉枯病防除のための本田散布の防除適期は、幼虫発生開始期から幼虫発生盛期の始期である。

3. 成果の活用面・留意点

- 1) 本成果は、平成28年に筑西市の現地圃場（品種「コシヒカリ」、5月16日移植）において行った試験の結果である。なお、育苗箱施薬は行っていない。
- 2) ヒメトビウンカ第二世代幼虫の発生時期には年次変動があるため、発生予測技術との併用が必要である。その年の防除適期は、病害虫防除所が発表する病害虫発生予察情報を参考にする。
- 3) 試験に使用した農薬は、平成29年2月1日現在、水稻に登録のある薬剤である。

4. 具体的データ

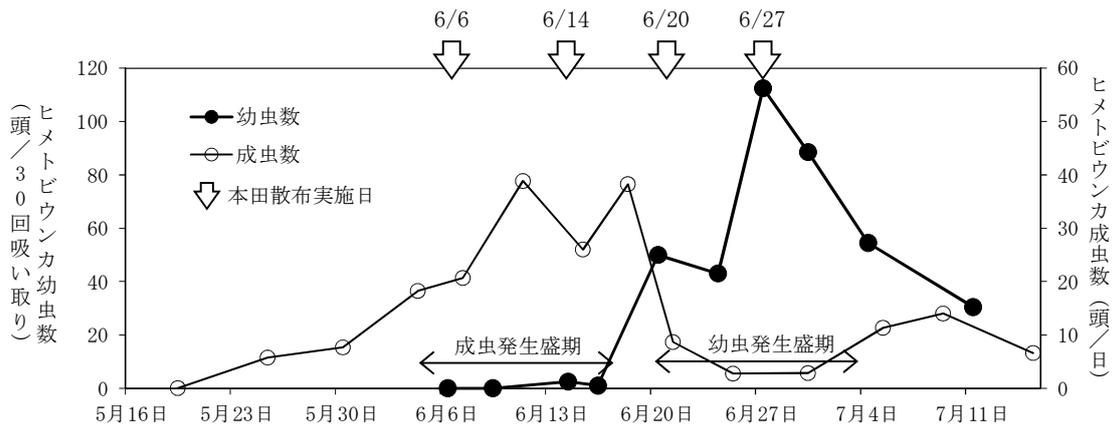


図1 無防除区におけるヒメトビウンカ成幼虫数の推移と本田散布時期（平成28年、筑西市）

注1) 幼虫数の調査は、バキュームプロアを用いて各区30株で行った。成虫数は、黄色粘着トラップへの誘殺数を調査した。なお、各調査期間の中央日を誘殺日とした。

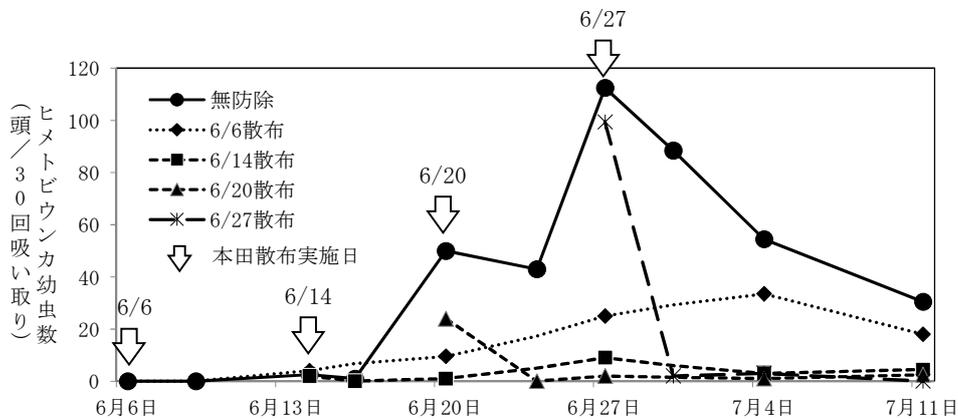


図2 本田散布時期別のヒメトビウンカ幼虫の生息密度の推移（平成28年、筑西市）

注1) 防除薬剤にはシラフルオフエン乳剤（商品名：MR. ジョーカーEW）を供試し、散布は6/6、6/14、6/20、6/27のいずれか1回行った。

注2) 幼虫数の調査は、バキュームプロアを用いて各区30株で行った。

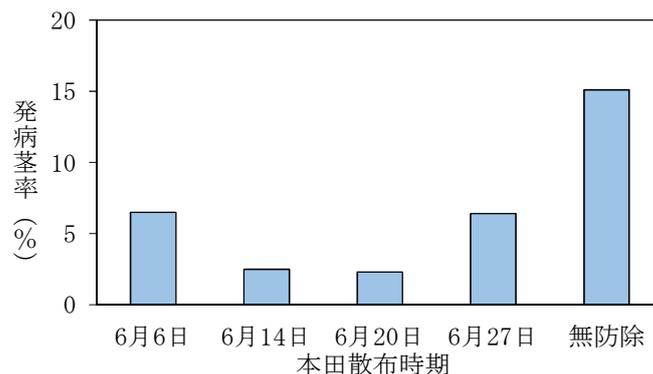


図3 ヒメトビウンカに対する本田散布時期がイネ縞葉枯病の発病に及ぼす影響（平成28年、筑西市）

注1) 薬剤名、散布日は図2と同じである。

注2) 発病茎率は、各試験区系統抽出した28株について8月8日に調査した。

5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

産地に応じて抵抗性品種と薬剤防除を適宜利用するイネ縞葉枯病の総合防除技術の開発・平成27～平成29年度・病虫研究室